

学生が伸びる学び方

大学選択

新たな視点



今号の視点

意欲的な学生を鍛える 専門性の高い少人数教育

学生の学力低下への対応が叫ばれる一方で、意欲や学力の高い学生を選抜して少人数教育を行う大学がある。大学は、どのような狙いからこうした選抜制プログラムを導入しているのだろうか。選抜制の形式は、学生の意識や意欲にどのような効果があるのだろうか。

意欲の高い学生に対し 学部教育に1+αの授業を行う

学生の学力や意識の多様化を受け、多くの大学がリメディアル教育に力を入れるようになった。その一方、より意識の高い学生を対象に、学部教育に加えて少人数制による高度な教育を実施する動きも見られる。掲げた教育目標を実現するために、大学が本腰を入れている動きといえそうだ。

今回は、大学の理念や特色を踏まえた少人数制の特別プログラム

を設ける二つの事例を取り上げる。特に、プログラムの内容が学生の学びやキャリアに対する意識にどのように作用し、成長を促しているかに着目したい。

少人数でフィールドワーク を重ね、実践力を付ける

愛媛大法文学部
「特別コース（地域・観光まちづくりコース）」

愛媛大法文学部は「地域コース」「観光まちづくりコース（観光政策系・観光文化系）」といった「特別コース」を設置し、少人数教育を実施している。国立大学法人化以

降、愛媛大が「地域にあって輝く大学」を掲げて地域貢献を図ったこと、観光振興を目指す地元の自治体や経済界から要望があったことなどが、設置の背景にある。

定員は、地域コース10人、観光まちづくりコース20人（観光政策系と観光文化系各10人）。このうち半数をAO入試で選抜する。その理由を、観光まちづくりコース長の寺谷亮司教授は次のように話す。

「近年、フィールドワークや現場に関心のある学生が減ってきています。学力だけでなく、自ら現場を訪れ、問題を発見し、解決策を

考えられる、積極的な学生に入学してほしいという思いから、AO入試を行っています」

入試では、地域活性化や観光をテーマにしたプレゼンテーション（20分間）が課される。地域コース3年の米森萌さんが「友だちが受験勉強をする中で、一人だけプレゼンの準備をするのは不安でした。でも、地域活性化に興味があり、それを学ぶにはこのコースしかないと必死に準備しました」と振り返るように、AO入試で入学した学生の意欲は高い。残りの半数は、一般入試で入学した学生が2年進

図1 愛媛大法文学部地域コースの活動(2008年度)

日程	活動
4月	合宿(伊予市双海町) まちづくりに関するヒアリング、地域コース交流会
6月	フィールドワーク(大分県湯布院、黒川、別府) ツーリズム、まちづくり、地域活性化に関するヒアリング
7月	地域交流(松山市大街道、銀天街) ヨーヨー釣り、くじびぎなどを夜市に出店
9月	フィールドワーク(京都府綾部市、南丹市美山町) 過疎地のまちづくり、むらづくりに関するヒアリング
11月	フィールドワーク(宇和島市きさいやロード) 中心商店街活性化に関する調査、商店主・通行人へのヒアリング
2月	フィールドワーク(大分県宇佐市安心院町) グリーンツーリズム、地域活性化に関するヒアリング
3月	報告書作成 2008年度フィールドワーク報告

地域コース2期生の1年次の活動。通常の学部生は2~3年次で年1~2回程度のフィールドワークを行うが、このコースでは1年次から5回実施。事前準備、実施後のまとめにもしっかり時間をかける
*学校資料を基に編集部で作成

級時のコース選択で選ぶ。

カリキュラムの特徴は、1年次から週1回あるゼミ形式の授業で、県内外の各地を訪れてフィールドワークを行うことだ。年2~3回の本格的なフィールドワークの他、日帰りで県内各地を調査する機会も多い。

地域コースの宮崎幹朗教授は「1年次から、人の話を聞き、論文にまとめる経験を徹底的に積み重ねさせます」と話す。例えば、観光まちづくりコース観光文化系では、1年次の授業で道後温泉の調査を続けている。観光まちづくりコースの井口梓

特命准教授は「授業の3回に1回は

現地を訪れ、調査をします。学生が関心のあるテーマを中心に、授業で学んだ調査方法を使いながらフィールドワークをしています。また、授業で身に付けたスキルを定着させるため、自主的に課外活動を行うようにも伝えていきます」と話す。観光まちづくりコース1年の織田加寿代さんは「夏休みに5泊6日で大分県の湯布院でフィールドワークをし、9月に開かれた北海道網走市の『全国大学生旅プランコンペin網走』には課外活動で参加し、市長賞を受賞しました。失敗

は覚悟の上で、勉強だと思いません。さまざまな調査に挑戦しています」と声を弾ませる。教員が事前交渉をある程度行い、取材日の交渉などは学生に任せると。宮崎教授は「3年次か

らは、自分たちで調査先も見つけ、交渉し、調査させています」と話す。こうした活動を通して、学生は知識だけでなく、ものの見方や考え方を学ぶ。寺谷教授は「話をうのみにせず、問題意識を持ちながら聞く力

も磨いてほしいと考えています」という。米森さんは「高校では受験のための勉強でしたが、大学では自分の足を使って学び、文献により知識を積み重ねていきます。高校とは学びの質が違っていると語る。

調査先で対立する価値観に触れ、学生が戸惑うこともある。09年度に地域コースの1年生が埋め立て・架橋計画問題で揺れる広島県福山市を調査した際、賛成と反対のそれぞれの立場の話を聞くうちに考えが混乱したという。答えが一つではない問題と向き合いながら、自ら考えて論文をまとめ上げることで力を付けていくのだ。

仲間意識を強め、 学び合う集団に成長

学生は、調査結果のまとめや論文作成のために、授業以外にも頻繁に

研究室に集まる。グループワークで学生同士が刺激し合う教育効果は高い。井口特命准教授は「グループの中でリーダーとなる学生、聞き取りが得意な学生、ノートを取るのが上手な学生、交渉がうまい学生など、自分の得意な事柄や役割に気付く効果があります」と話す。宮崎教授は「学生は研究室の中で居場所を見つけ、仲間がいる心強さを感じることも学びに向かうようです。先輩・後輩の関係も強く、学年を超えて学び合う姿も見られます」と話す。

地元の要望を受けて設置されたコースであるため、例えば観光コースでは、愛媛県と3か年計画の連携事業に取り組み、県内市町村からの連携の依頼もある。しかし、現状では学生に意見を聞いたり、活気ももたらしてほしいという程度のものであり、今後いかに地域の期待に応えていくかが課題の一つだ。

また、専門性を直接生かせる就職先の受け皿が少ないことも今後の懸念だと、井口特命准教授は話す。「私たち自身が学生の就職先を広げる努力をしていかなければならないと考えています」

徹底的に学ばせる指導で 中国に強い人材を養成

亜細亜大
「アジア夢カレッジ」

亜細亜大は、2004年度、中国に特化したキャリア開発プログラム「アジア夢カレッジ」を導入した。各学部にも所属しながらも、中国語や中国の文化・習慣などを、5か月間で集中的に学ぶ4年間の特別コースだ。アジア夢カレッジ運営委員長を務める石川幸一教授は、「アジア地域に強い人材を育てる本学の理念を体現したプログラムです。年々、重要度が高まる中国とのビジネスで生かせる実践力の養成に重点を置いていきます」と話す。

プログラムが求める到達レベルは高く、通常の学部教育と並行して受けることもあり、一般の学生に比べ負担がかなり大きい。十分な基礎学力に加え、相応の覚悟と意欲を備えた学生でなければ脱落する可能性があるため、選抜試験では学習意欲や志望動機が重視される。留学中は語学研修に加え、1か月間のイン

ターニップに参加することなどから、精神的な強さも必須の条件だ。こうした厳しさが学生間に伝わっているためか、定員の40人に満たないこともあるが、追加募集はしない。

4年間を一貫する方針は、自分で考え、積極的に動く「考動力」を育てること。1年次から自己テーマを設定し、自分で調べてレポートを作成したり、プレゼンテーションや議論をしたりする力を育てる。レポート作成では、文献調査だけでなく、インタビューやアンケートなど、自ら動いて調査する姿勢を重視。教員は学生を支援するが、あくまで自分で考えさせる指導に徹する。

高い壁を乗り越えた 経験が自信となる

キャリアの土台となる知識やスキルの習得にも力を注ぐ。とりわけ中国語力の養成は徹底して行い、レベル別の少人数授業や多くの補講を実施する。1年次で中国語検定3級に合格しなければ、2年次の留学が許可されないため、どの学生も自主勉強会に参加するなどして必死に勉強

する。国際関係学部の三橋秀彦准教授は、「中国語検定3級は、英語でいえばTOEIC 600点台後半に相当する難度だと捉えています。一から学習を始める学生にとっては、毎日2、3時間自習をしなければ合格は困難です。これをクリアすれば、留学先での意思疎通は問題がなくなる上に、大きな自信となつて成長への弾みとなります」と話す。

留学先では、学生寮での中国人学生との共同生活を通じて異文化理解を深める。また、現地の日系企業で1か月間のインターニップを行う。取引先の企業に訪問したり、商品開発に携わったりしながら、自分の力を試し、将来を具体的に思い描く機会となる。

3、4年次は、プログラムの比重は軽くなり、自己テーマを深めて論文を作成しながら、所属学部の専門

図2 亜細亜大「アジア夢カレッジ」のプログラム

	専門分野	中国理解
1年次	・フィールドワーク ・基礎ゼミⅠ	・中国キャリア開発入門Ⅰ・Ⅱ ・中国研究Ⅰ
2年次	・基礎ゼミⅡ	・現代アジアのひとと社会 ・現代アジアと中国
	大連留学&インターニップ ◎大連外国語学院留学 ・中国語 ・中国の仕事と生活 ・知の探検 (中国の伝統と文化) ◎インターニップ ◎自己テーマ研究、調査	
3年次	・応用ゼミⅠ・Ⅱ	・中国ビジネス法務 ・現代アジアとキャリアデザイン
4年次	・成果指導ゼミⅠ・Ⅱ	

学部の授業と「アジア夢カレッジ」の授業を並行して受けることで、学部の専門性とアジアの専門性の両方が身に付くカリキュラムとなっている

*学校資料を基に編集部で作成

性を高める期間に充てられる。三橋准教授は、「中国人とビジネスとしてのコミュニケーションが出来たという自信は、『考動力』に結び付き置かれるため、プログラムで得た経験と自信を学部の学習でどう生かしていくのか、そして我々はどうか支援していくかが課題です」と語る。

国際関係学部3年の船岡勇甫さんは、「本学は第1志望ではありませんでした。『アジア夢カレッジ』に参加し、1年次から前向きな気持ちで学べました。高校時代よりも必

自分の頭と足を使って
考えることの重要性に気付く



愛媛大法文学部
総合政策学科地域コース4年
木ノ下 莉子
(愛媛県立伊予高校卒業)

私は愛媛県伊予市出身で、元々地域の活性化に関心があり、地域コースを選びました。

これまで、フィールドワークや課外活動などの体験を重ね、毎年1冊、グループで論文を作成してきました。1年生から論文を作成するのは他コースではほとんどありません。その論文を基に「日本学生経済ゼミナル大会」に毎年参加し、ディベートをします。その際には必ず全員が発言します。全員が協力して論文を作成しているため、自信を持って意見を言えるのです。

考えを深めながらフィールドワークや論文作成を積み重ねることによって、必要な知識が自ずと定着することに気が付き、考えることの重要性を実感しました。また、現地ではさまざまな立場や年齢の人と話す機会があり、初対面の人とコミュニケーションを取る力も磨かれたと思います。

卒業論文は、入学時からかわってきた地元の伊予市の事例を織り交ぜながら、地方都市における中心市街地の活性化をテーマに取り組んでいます。

自分の考えを表現する大切さを
インターンシップで痛感



亜細亜大国際関係学部
国際関係学科4年
井山 莉
(神奈川県・私立横須賀学院高校卒業)

中国への関心が高く、学生への支援が非常に厚い「アジア夢カレッジ」で学べば、大学生活が充実しそうだと思います。亜細亜大に入学しました。実際に4年間プログラムを経験し、中国語の勉強はかなり大変でしたが、意欲のある学生をとことん支援してくれるプログラムだと実感しています。

最も成長できたきっかけは、留学先の日系食品メーカーでのインターンシップです。現地の店に商品を提案したり、中国向けの新商品を開発したりする中で、自分の頭で考えて行動することや、言語も文化も違う人に自分の考えを伝えることの難しさを痛感しました。多くの社会人と話し、自信も付きました。就職活動での初めての面接では、面接官から「堂々として、初めてとは思えない」と驚かれました。

就職は、中国ともかわかりが深い旅行会社社に決めました。プログラムを通して、日中ビジネスに携わりたいという思いが強まったからです。将来的には、中国で仕事したいと考えています。

死に勉強し、中国語検定の合格やインターンシップの経験は何より大きな自信となりました。語学だけでなく、文化やビジネスについても中国に精通することが出来、周囲とは違う力が付いたと思います」と話す。

これまでプログラム受講者の就職率は100%で、内定が決まる時期も一般の学生に比べて早い。三橋准教授は、「学生の目的意識の高さに加え、インターンシップなどを通じて多くの社会人と接する経験からコミュニケーション能力が高まることも、就職活動に好影響をもたらしている」と考えています」と語る。

このように「アジア夢カレッジ」の受講者は、意欲や学習成果などの水準が高い。同大学ではそれを他の学生にいかに関及させていくかを、今後の課題としている。

進路指導に生かす

目的意識が高い学生には
学び方にも注目させたい

選抜制プログラムの背景には、意欲のある学生を埋もれさせずに、大学の独自性を生かし、社会的な要望に応える資質を備えた人材を養成し

たいという考えがあるようだ。今回紹介した二つのプログラムにも、大学の理念が色濃く反映されている。また、選抜制は、意欲の高い学生を顕在化する手段としても機能している。更に、少数数で授業を行うことにより、学生は責任感を持ち、前向きに学習に取り組むため、このような学習形態とする意義は大きい。

将来の希望が明確な生徒にとっても、厳しくても高い成果が期待できるプログラムは魅力的な選択肢になるだろう。たとえ第1志望でなくても、入学後の目標を持てるのであれば、不本意入学というミスマッチは起こりにくい。学びたい学問が合致するならば、選抜制プログラムのような学び方のある大学を視野に入れるのもよいだろう。大学名や学部だけでなく、大学での学び方について深く考え、将来像を描ききつかけにもなるはずだ。

ご意見・ご感想をお寄せください

◎今回の内容に関するご感想やご意見、今後取り上げてほしいテーマなど、編集部にお寄せください。

e-mail: view21_since_1975@mail.benesse.co.jp